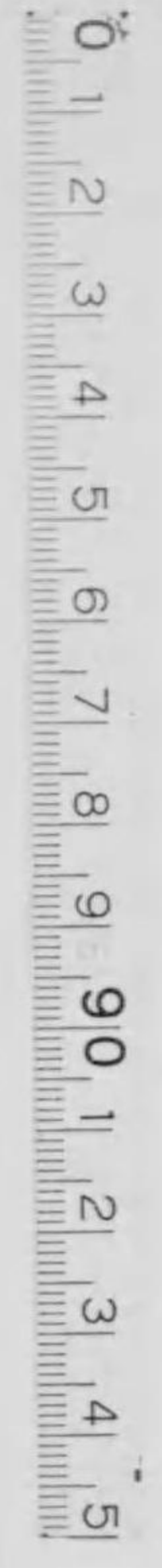


41  
25



日本陶磁器全書 六



始





418-25



日本陶磁器全書

大正  
7. 6. 10  
内交



日本陶磁器全集第六卷

例言

一本書第六卷は會員伯爵松平直亮氏及び子爵京極高修氏、根津嘉一郎氏の寶什を乞ひて之れを掲載するの光榮を得たり、茲に特記して感謝の意を表す。

一書史部に収録する所「考陶異説」は歐米人の本邦陶磁器に關する研究を抄譯纂輯せる所なり。

大正七年五月

目次

一 仁清作 吉野山茶壺	子爵 京極高修君藏
(第一圖) 全形正面 着彩版 (第二圖) 同上側面 着彩版	
二 長次郎作 菊桐香合	伯爵 松平直亮君藏
(第一圖) 全形 着彩版 (第二圖) 蓋の正面及箱書	
三 祥瑞作 染付茶碗	根津嘉一郎君藏
(第一圖) 全形 (第二圖) 香蓋	
四 伊賀花瓶	同
考陶異説	書史

JAPANESE POTTERY & PORCELAIN  
VOLUME 6

Edited by The Japan Pottery and Porcelain Society  
To be completed in 12 volumes; Subscription for whole vols., in advance, 28 yen (abroad postage extra); Details apply to the Secretary; Office: No. 11, Shiba Park, Tokyo; Telephone No. Shiba 5535.

CONTENTS

1. Tea-jar, by Ninsei, Marugame ware—Collection of Viscount T. Kyo-goku, Tokyo.
  2. Incense case, by Chojiro, Raku ware—Collection of Count N. Matsudaira, Tokyo.
  3. Tea-cup, by Shonzui,—Collection of K. Netsu, Esq., Tokyo.
  4. Flower vase of Iga ware—Collection of K. Netsu, Esq., Tokyo.
- (ALL COPY RIGHT)

白茶壺金剛、融けのり式大。

壺口圓形一風切二に示す如し。口蓋蓋もテ金剛式蓋、香蓋蓋の形はの全面式蓋。壺口一目子封の茶山香蓋が文へ洞の縁がむすし蓋蓋の形は六角形。其三式に示す。蓋土の白砂とらざる大なる蓋を二枚、蓋蓋正す。高寸七正寸、永保の蓋三寸四寸、蓋蓋蓋。表裏山茶壺、亦其蓋の一角京師家の表、二筋が附して其蓋内の一

千箱 京師高修君藏  
一 仁清作 吉野山茶壺

I. TEA-JAR BY NINSEI  
COLLECTION OF VISCOUNT T. KYOGOKU,  
TOKYO.

Fig. 1 & 2. The whole figure (Photomicrograph)

It is one of examples of Marugame-ware that the famous Ninsei (1644-21) sprung up the kiln under the order of the Lord of Marugame. It is coated with bright crackled glaze, and painted the scenery of Mount Yoshino, a noted place for cherry blossoms, in very rich colour with gliding.





一 仁清作 吉野山茶壺  
子爵 京極高修君藏  
 京極家の先、仁清を招して丸龜城内に一窯を築く。芳野山茶壺も亦其製の一なり。高七寸五分、糸切の徑三寸四分、ふくらみ最も大なる部分に於て徑約五寸六分なり。耳三方にあり。赤土にて白砂を交へ灰色の釉をかけた微細なる劈疵全面を覆ふ。所謂一目千株の芳山春景を描きて金砂花雲を包み、寺権殿に浮ぶの妙趣は圖版一及び二に示すが如し。口覆は白茶地金網、縁はこれを欠く。

**I. TEA-JAR BY NINSEI**  
 COLLECTION OF VISCOUNT T. KYOGOKU,  
 TOKYO.

Figs. 1 & 2...The whole figure. (Chromoxylograph)

It is one of examples of Marugame-yaki that the famous Ninsei (1644-51) sprung up the kiln under the order of the Lord of Marugame. It is coated with bright crackled glaze, and painted the scenery of Mount Yoshino, a noted place for cherry blossoms, in very rich colour with gilding.





一 仁清作 吉野山茶壺  
 子爵 京極高修君藏  
 京極家の先、仁清を招して丸龜城内に一  
 室を築く。芳野山茶壺も亦其製の一な  
 り。高七寸五分、糸切の徑三寸四分、ふ  
 くらみ最も大なる部分に於て徑約五寸  
 六分なり。耳三方にあり。赤土にて白砂  
 を交へ灰色の釉をかけたリ緻細なる時瓶  
 全面を覆ふ。所謂一目千株の芳山春景を  
 描きて金砂花雲を包み、寺樓霞に浮ぶの  
 鉢屋は圓版一及び二に示すが如し。口覆  
 は白茶地金襴、繕はこれを欠く。

I. TEA-JAR BY NINSEI  
 COLLECTION OF VISCOUNT T. KYOGOKU,  
 TOKYO.

Figs. 1 & 2..The whole figure.(Chromoxylograph)

It is one of examples of Marugame-yaki that the famous  
 Ninsei (1644-51) sprung up the kiln under the order of the  
 Lord of Marugame. It is coated with bright crackled glaze,  
 and painted the scenery of Mount Yoshino, a noted place for  
 cherry blossoms, in very rich colour with gilding.





二 長次郎作 菊桐香合

伯爵 松平直亮君藏

漆黒の軸を以て被はる、氣泡あり、金泥を以て菊桐を描く、徑三寸、高一寸。

第一圖は着彩して全体の姿を示し、第二圖は蓋表の文様と不昧公の菊書附を指示、文に曰く、細川三善公太閤より給ふ所と、此香合の由来を語り盡せり。

INCENSE-CASE BY CHOJIRO

COLLECTION OF COUNT N. MATSUDAIRA, TOKYO.

Fig. 1..The whole figure (Chromoxylograph)  
" 2..The design on the face of lid, and the writings on the cover of the box keeping the case, by Lord Fumai (Collotype)

Thickly covered with a brilliant black glaze. Two crests of chrysanthemum and poulownia are represented with gilding in the style of *makiye* (fig. 2). It is said that the case was presented from Taikô to Hosokawa Sansai, ancestor of the present Marquis Hosokawa. The writings on the cover of box (fig. 2) express the history.





二 長次郎作 菊桐香合

伯爵 松平直亮君藏

漆黒の釉を以て被はる、氣泡あり、金泥

を以て菊桐を描く、徑三寸、高一寸。

第一圖は着彩して全体の姿を示し、第二

圖は蓋表の文様と不昧公の箱書附を

示す、文に曰く、細川三齋公太閤より給ふ

所と、此香合の由來を語り盡せり。

INCENSE-CASE BY CHOJIRO

COLLECTION OF COUNT N. MATSUDAIRA,  
TOKYO.

Fig. 1. The whole figure (Chromoxylograph)

" 2. The design on the face of lid, and the writings on the cover  
of the box keeping the case, by Lord Fumai (Collotype)

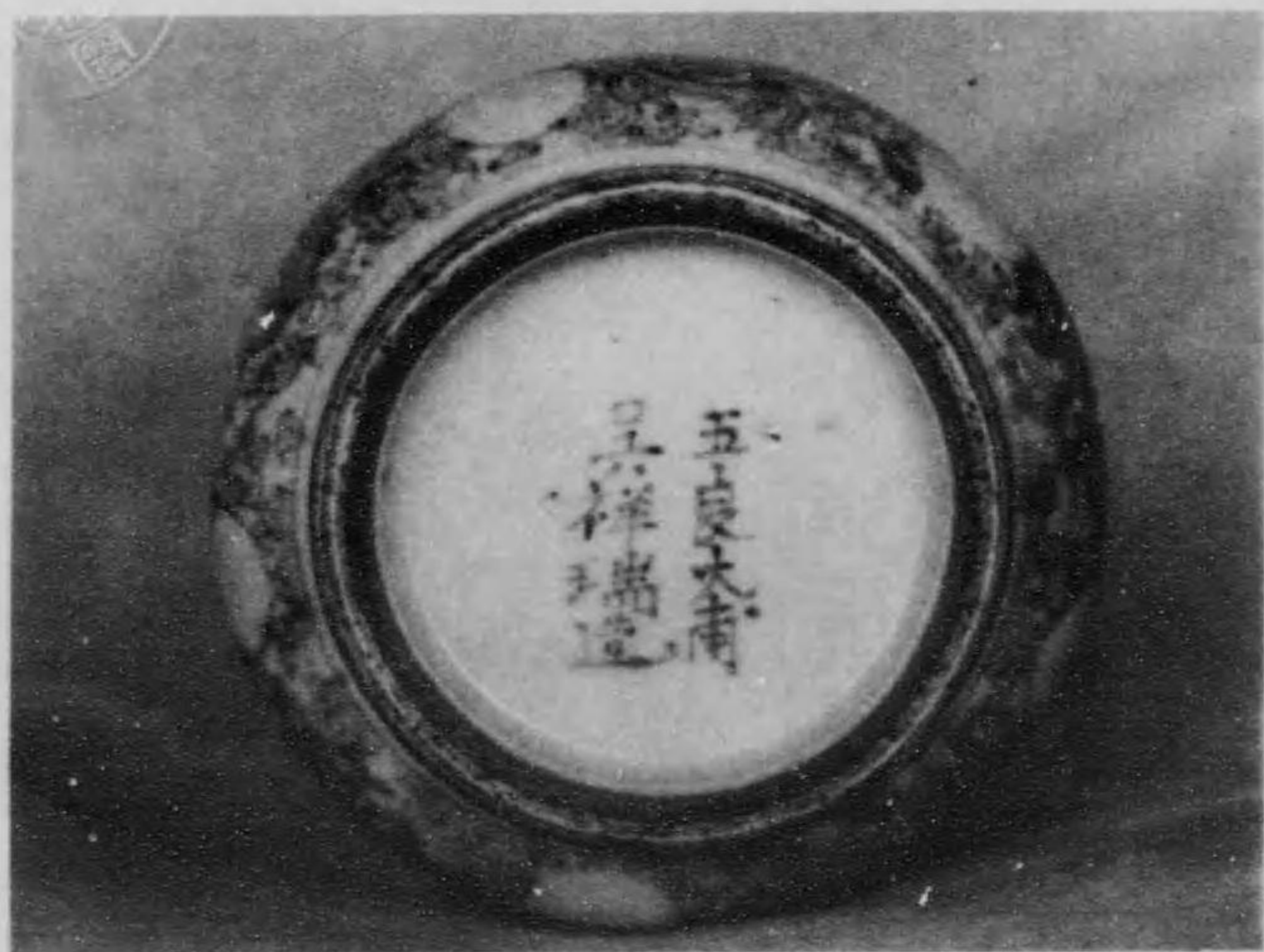
Thickly covered with a brilliant black glaze. Two crests of chrysanthemum and poulownia are represented with gilding in the style of *makiye* (fig. 2). It is said that the case was presented from Taikô to Hosokawa Sansai, ancestor of the present Marquis Hosokawa. The writings on the cover of box (fig. 2) express the history.





上海商務印書館





三 祥瑞作 藍繪茶碗

根津嘉一郎君藏

祥瑞の特色は其藍色の鮮麗さ、筆致の生  
彩ありて何等の拘束なきとに存す。此作  
は世に所謂丸ものと稱せらるゝものにし  
て、文様の間に幾多圓形を描きて飾紋の  
連續を絶てるものなり、第一圓は全形を  
示し第二圓は其香台を示す、五夏大甫矣  
解瑞造の銘、殊更に力あるを見よ。寫眞  
原寸。

TEA-CUP BY SHONZUI

COLLECTION OF K. NETSU, ESQ., TOKYO.

Fig. 1...The whole figure, (Collotype)  
,, 2...The base (do).

It is an authentic example of the work of Shonzui, who introduced the art of porcelain from China early in the sixteenth century. He built a kiln at the northern part of Hizen, and manufactured blue and white porcelains in Chinese style. This led to the foundation of the famous Hizen kilns. Photo'ed in natural size.





四 伊賀 花瓶

根津嘉一 郎君藏

形の奇、釉の變化、すべてこれ伊賀の特色なり。土色灰一にして暗緑色の釉によりて被はる、上下を貫きて褐色の釉流る。古昔種痘の用に於て、口に近く左右に小孔を穿てるあり、今墨土を以て塞ぎ、蓋し絲を以て器を吊るの爲なりしと云ふ。高さ八寸五分。耳より耳までの徑四寸七分なり。

FLOWER VASE, IGA WARE

COLLECTION OF K. NETSU, ESQ., TOKYO.

(COLLOTYPE)

It is very rudely made, and has two projecting ears as handles, (dia. between both ears, approx. 5 $\frac{3}{8}$  in). Glazed with greenish grey on the pale grey body. H. 10 $\frac{1}{8}$  in.



# 書陶異説

一本書は日本陶磁器に関する歐米人の  
研究を譯纂したるものにして其主  
なる原著者は左の如し。

Audsley, G. A.      Franks, A. W.  
Baker, S.            Goussier, L.  
Bowers, J. L.        Jacquemart, A.  
Brinkley, F.         Mew, E.  
Dillon, E.            Morse, E. S.

一本書は其主文を Morse 及び Bowers  
二氏の原著に據り自餘の諸器は之れ  
を補文とせり。  
一翻譯は本會編輯員之れに當れり。

目次 一肥前 二備前 三對馬  
四土佐 五攝津 近江  
寫眞 ポストン美術館に於ける日本陶器



○肥前焼の名は其有名なる製作と共に廣く世界に知られ、染付色繪日蘭通商の初期に於て、長崎附近の磁窯は和蘭輸出の目的を以て、大なる壺或は皿等を多く製出せり、有名なるドレスデン市に於ける蒐集の如きは、殆んど悉く此色繪の大壺を以てせり。

○唐津焼の名は極めて廣汎なる範圍を包容せるものにして、其陶器は時代と品種とに従つて各異なれる名稱を以て呼ばる。これ日本の専門家中にも種々の相反對せる意見ありて之れを調和するは甚難し、故に吾人は唐津の總名の下に其全體を考へ以て混亂を防がざるべからず。

○唐津の古邑に於て陶器の製せられしは極めて幽遠の時代にあり。記録によれば釉を施せる陶器が唐津に製せられしは一二〇〇年前後（建仁頃）にして、朝鮮の陶工が此地にて製作せしは遙に後れし十六世紀の事に屬す。其陶器は色及び釉に従ひて頗る多趣多様にして、裝飾あるもの、繪様は黒又は褐色にて粗雑なれども、三嶋式のもの

## 考陶異説

### 肥前

肥前焼は薩摩京都加賀等の如く特異の美觀を有せざれども、また賞玩に値すべき特色尠からず、日本に於ける最初の陶産地と稱せらる。而して過去二世紀間日本が全然鎖國の状態に在りし時代に於て、幾多の裝飾的製品を出して長崎に於ける和蘭貿易品として、遠く歐州に輸出せられ、他邦に對して日本人の手技に巧なるを示したり。

### 唐津

肥前に於ける最初の製陶場は唐津窯にして、早く十七世紀に於て存在し、釉薬の使用は實に此窯に於て始められ、南部日本に於ける陶器の假稱として『唐津物』と稱するに至れりと云ふ。

此古窯に於て製せられたるものに就き、其色、土、及釉其他に據つて種々の呼稱を生じたり、今三四の例を擧ぐれば、十四世紀の製なる米鉢の類をヨネハカリと云ひ、十五世紀の製かる鼠色又は鉛色釉を施せるをネヌケと云ひ、十六世紀の製としては、オク・ユウライ、セト・カラツ、エ・カラツ等の稱ありて、其名の示すが如く、高麗焼を摸し、瀬戸焼に準じ、また草花等の文様を以てせる等の謂ひなり、稍近世に至りて朝鮮より土釉を移入して焼成したるを、チョウセン・カラツと呼び、又昔時作られたる器物



は意匠單純なり。硬質粗糲にして多くの點に於て鑄鐵に似たる陶土と其外見原始的なるものにも拘らず、研究するに従つて益々其興趣の深きを加ふ。其古代の製品は過去に屬し、化石と同じく之れを複製する能はず。即ち陶土を採掘せし場は盡滅し、釉の製法亦傳はらず。これを以て古唐津燒は唯一無比のものにして、其最古の式は青黒き陶土と釉とより成る。其後朝鮮陶工唐津に來りしが其手に成れるものを與高麗と稱し、朝鮮人の作に似たる陶器は之れを朝鮮唐津といふ、又古き窯の遺跡より發掘せられし破片を堀出唐津と稱し、簡單なる繪画又は黒色にて飛沫あるを繪唐津と呼び、白色の刷毛目あるものを刷毛目唐津と名づく。其他三島唐津、献上唐津等あり。斯くの如き區別は多くは特別の陶工、窯、時代を示すものにあらず、又極めて漠然たるものにして専門家さへ其區別に迷ひ甚しきは其定義をも知らざるものあるが故に極めて不合理且無益なる區別と云はざるべからず。然れども他に據るべき材料なく、又目錄編纂上の便宜より茲には大体に於て此分類を用ゆることとせり。

の破片又は燒度を過したるが爲めに完成に至らずして捨られたるもの等を掘出して、當時の茶家が趣味に合致するが如く、古風なる製作を試みしものと呼んで、ホリダシと稱するが如きこれなり。かくの如きを總稱して「古唐津」と云ふ、皆これ粗笨にして藝術的ならざる底のものにして、十四世紀より十六世紀に涉りて製せられたる所なり。この以後大いに精巧を極めたる製作ありて、これをケンジョウカラツと云ふ、徳川將軍に献上の目的を以て作られたるものなり、此種の作品は其材料、形状、釉藥、意匠等に於て著しき進歩を示せるものにして、其意匠には往々三島燒の如く、鼠色の素地に白土を箆して徳川氏の紋章を現はせるものあり、此窯は今尙存在す。雖も、單に普通の雜器を製するに過ぎず。銀唐津

特殊の白釉の唐津を云ふ。以て此地に製出せらるる他の白釉のものと同分せり。日本の他の窯所に見るものとは全く其趣を異にす。

瀬戸

唐津城より遠からぬ瀬戸村に昔四窯あり既に久しく廢絶に歸したるものなるが其産を瀬戸或は瀧戸唐津といふ。

椎峯

赭褐色の土に透明なる釉を施し、更に其上に黒青、其他の釉を濃厚に掛けたるもの。唐津に近き椎峯に於て製さる。

龜山 龜山  
泉山 泉山

○肥前に於ける重要な陶産地は有田町の附近にあり、こゝに製作されるものを總稱して、伊萬里燒と云ふ、これすべての製品伊萬里

黒牟田  
五郎七

蟻川氏及び其他の記録に従へば一五三〇年(享祿三年)高田五郎七初めて染付陶器を作れりといひ、更に又五郎七及び其弟五郎八は有名なる祥瑞の弟子なりしといふ。此事に就て執行弘道氏は祥瑞が肥前國に於て陶器を作り又此國に此術を教へしここに就て何等の證據を發見する能はざりしと云へり。五郎七の陶器は多く大形の茶碗にして、其名は大形の茶碗の異名となるに至れり。

龜山

當世紀の初め長崎に於て龜山と記せる磁器製造せられたり。多くは雅致に富めり。雖も特に秀でたるものとは云ふべからず。

一八三〇年(天保元年)の頃支那より陶土を輸入して、種々の形態のものを作れり。其模範的龜山燒は良好なる赤色の土より成り一面に青味がかりし灰色の釉を掛け、之れに暗青の草花、詩歌を描けり。

平戸

平戸の名は其優秀なる藍繪を以て世界に知らる。其最良のものは前世紀中葉の作に係る。

有田

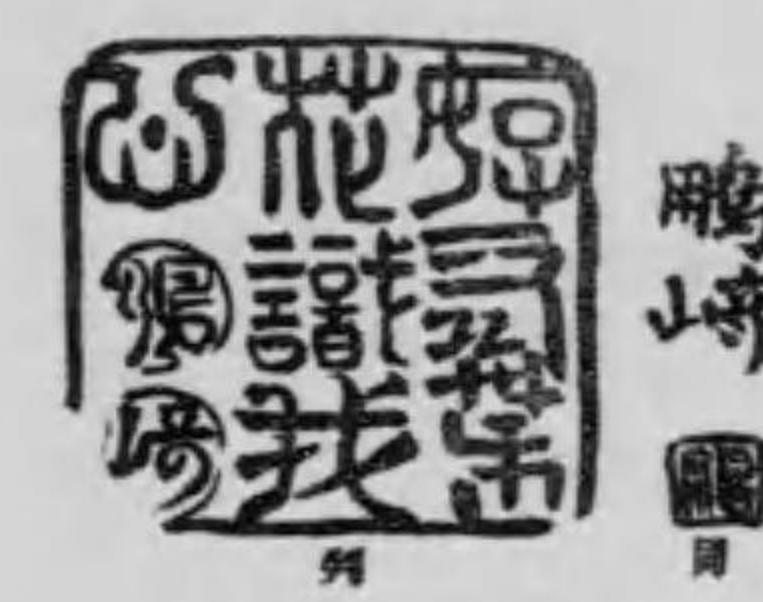
うつし川



町より諸國に發送さるゝより起れるなり。葡國商人は一五四二年(天文十一年)、蘭人は一六〇一年(慶長六年)此地に來り、以來盛に「古日本」を歐洲に輸出したるなり。  
愛に古日本と稱するは「Old Japan」の事にして、わが古伊萬里に對する外人の呼稱なり、以下これに準ず。

# 鵬崎

銘き書



考陶異説—肥前

此村は長崎附近にあり。十六世紀中朝鮮陶工暫らく此處に陶器を製す。十七世紀の初め又田中及びシゴトミ窯を起し、十八世紀迄繼續して再び斷絶せり。近年此地に良好なる赤土に茶褐色の釉を施し、其上に白き波状の刷毛目の釉を掛け些か彩色を施せるもの製出せらる。  
 ヤガミ  
 赭褐色の土に黄色の班紋ある薄釉を施せる粗鬆の陶器、五十年以來此町にて製せらる。

## 鵬崎

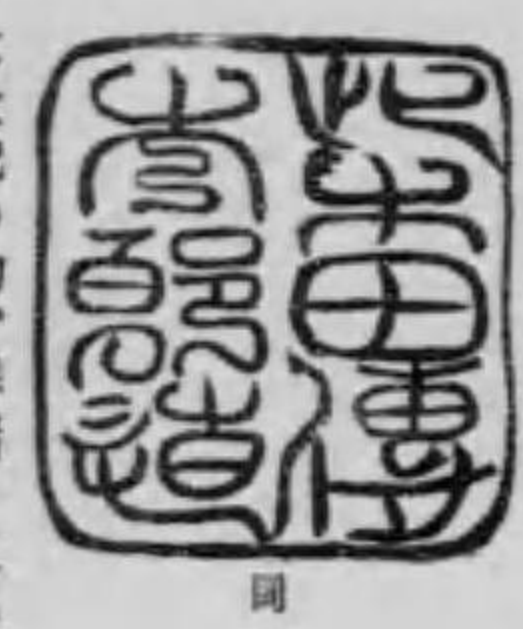
一八三〇年(天保元年)長崎に近き鵬ヶ崎村に蒲地秀吉云ふ者窯を起せり。秀吉は陶工にして同時に詩人なりしが故に其作には多く自作の詩歌を刻み又は書きたり。専ら茶器を作り多少粗雜に見ゆる所ありと雖も頗る趣味に富み又巧妙かり。其製陶の業は屢斷續して十年間に亘れり。其無銘のものに就ては日本の専門家も或は信樂といひ或は相馬と稱し、甚しきは出雲となすことあり。  
 赤彦  
 三河赤彦と記せる陶器は其土質及釉鵬崎に酷似せり。然れども其外觀晴々しく又一種の特徴を有す。特に其鵬崎と異なる點は釉中に白色の班點あることにして、署名あること稀なり。此製は極めて妙し。  
 松濤

# 三河

銘き書



正吉 銘き書  
同 銘き書山城



○十六世紀の初、群猫の支那より歸るや、眞の陶器を造るべき良士を得ざりしが同世紀の末、韓人李

唐津に似たる茶碗にて相當年代を経たる松濤の刻印あるものあり。又暗褐色の方形の鉢に字體は異れども同じ刻印あるものあり。共に肥前と鑑せられ又同一陶工の作なるべしと認めらる。  
 城山  
 ホストン美術館所藏のものに多少硬質坏土の青釉及び裝飾を施せる茶碗あり。龜山に近き城山にありし優秀なる肥前陶工の作と認めらる。此窯は廢絶してより既に五十年以上を経過せり。

正白  
 近年椎峰村製の陶器に正白の印あるものあり。

柴田  
 柴田傳太郎の刻印ある無釉の急須あり。近年嬉野に作らるゝ所かり。

嬉野  
 嬉野にては嘗て伊萬里に似たる陶器を作れり。二百年以前には此處に種々の陶器製されたり。

走波  
 安政年間京都の陶工走波といふ者肥前白石に來りて暫らく陶器を製す。永樂の風なれども其作極めて稀なり。

伊勢松阪の産、五郎太夫祥瑞なるもの、製陶の技を修めんとして支那に赴き、一五一三年(永正十年)歸朝するや、共に土釉を齎し來りて、少數の陶器を製作せり。今これを波れが遺作により

考陶異説—肥前



參平、北郡九州に陶石を發見せり、これ支那人が長く秘密としたる陶石を含有せる粗面岩にして、依て肥前窯業の礎をなせるものなり。

て判するに、彼れは(一)上釉の下に藍色を以て文様を表はしたる染付焼、(二)赤茶、黒、緑、紫及び金等を以て上釉の表に錦綾の如く文様を描きたる錦手焼、即ち所謂古日本に屢々見る所の法にして、今尙肥前焼に多く見る所のものなり、(三)青磁、(四)ヒヤ焼の四種を齎せるもの、如しと雖も錦手の製をも彼れに發すと云ふは少しく誤れりと云ふべし。

十六世紀の末、大開征韓の役あり、陶工を伴ひ來りて、諸州盛に陶業を起すに至れり、これ等の韓人陶工中殊に記すべきは、李參平にして、鍋嶋直茂の臣多久安順と共に肥前に來りて土器を焼成せり、現に其窯址の附近より掘出す所ハリダシと稱するは此工人の遺作と稱すべきなり、後有田に近き泉山に良土を得て始めて陶器を焼成せり、爾來泉山附近をして偉大なる發展をなさしめたるは、實に彼れが良土發見の賜と云ふべし。

後約半世紀間は何等進歩の見るべきものなかりしが、一六四七年(正保四年)東嶋徳左衛門と稱する工人、長崎に赴き、支那貿易船長某に就て明時代の方法たる釉面に各色の彩畫を描く事を習得せり、爰に於て錦手の法は祥瑞の傳に非ずして徳左衛門の法なりと稱するを得べし。

此種の製品は所謂古日本と稱するものにして、其形態なり其着色なり全然歐洲式のものにして、日本の玩賞家の多くは之れを自國製なりと云ふを肯んせずして、却つて日本式を模したる歐洲製品なりと稱すれども、これ今日の日本人をして斯く云はしむる迄歐洲向に作られたるものにして、某蒐集家の如きは、有名なるドレスデン市の蒐集を一覽して、これ恐らくは、日本趣味又は日本意匠を加へざるべき條件注文によりて製造したるものなるべく、中には嫌惡に堪へざるもの多しと語れり、是等の陶器は純白なる素地に美しくしき色彩を以て花鳥を描ける事錦手と同じく、歐洲人の眼よりすれば立派なる裝飾的のものなり、最初和蘭に輸入されたるは論なく、ジャックケマルトに依れば、一六六四年(寛文四年)四万四千九百四十三箇の輸入ありたりといふ、されば可なり多數の輸入ありて、當時の富豪等の手に分たれ、以

て今日に残れるもの尠からざるなり、其最も偉大なる蒐集は一六九八年(元祿十一年)より一七二四年(享保九年)までポオランド王にしてサクソニー撰擧侯たりしアクグスト二世のドレスデン市に設けたる日本宮殿に於けるものこれなり。

次で、日本陶工史の上に特記すべきものあり、これ實に柿右衛門の事なり、彼れの作は、普通厚く且つ重きに反して、特に輸出向として作られしものか、純白にして且つ薄く、浮樸自然の圖案を以て花鳥類を描き、他の古日本が集合的に美麗に花鳥を取扱へるに比すれば、頗る日本的なり、而して其色彩及び金色の使用に於ても俗美にあらずして精巧然も華麗に陥らざるの感あり、爾來柿右衛門の模倣各地に起れりと云ふ。

### 三河内

三河内焼は原々平戸焼と唱ふ、其美麗なる藍繪と精巧なる形態との爲めに百五十年來有名なるものなり。

大河内焼はもと有田に近き岩屋川に在りしが、一七一六年(享保元年)藩侯鍋嶋氏の命を以て現所に移されたものなり、侯は其製品を専ら候の友人に贈進せられ、これが販賣を禁せられたり、従て其工人もこれを臣下として待遇せられたりと云ふ。

### 備前

此國の製は赤褐色を帯びたる硬き陶器にして日本に於ける最も特色あるものの一なり、一度び之れを見れば容易に他と混同するが如きことなし、然れども備前陶器中にも幾多の變化あり、時代の推移と共に燒

○三河内焼は一五九六年(慶長元年)朝鮮の陶工によりて創められ、最初平戸焼と稱して支那青磁を模したる青磁釉の土器を製せしが、近世有田錦手の類を模倣するに至れり、十八世紀の中頃、平戸藩主松浦侯は大いに陶業を奨励せられ、従つて名作の出るもの尠からず、中に最も多きは小形の香具にて、釉の下に藍を以て支那兒童松樹の下に嬉遊する状を描きしもの、これ松浦侯より將軍を初め知友に贈られたるものなり、其原土は天草又は五島より採れりと云ふ。

備前窯はこれを備前焼、伊其焼及び火鑪の三種に大別す、共に其質は同じけれども其外觀を異にし、此窯の創始は明かならざれども崇市



天皇の時に始まると稱せらるれど此頃は祭神用の土器を造りし事なるべし。これ此窯の在る伊部村の地名が往古祭器を造れる事を意味するに依りても證せらるゝ所なり。

磁器の製されしは一二一〇年(承元四年)よりと稱せられ始め種壺の如き農器を製作せり。今これを「古伊部」と云ふ。現に所謂伊部焼は一五八〇年(天正八年)に始まるものなり。

○備前の磁器は其表現甚だ硬く緊密なる事、日本に於て稀に見る所なり、従つて其製品も重く且つ立体的のもの多く光澤なき白釉を以て被はる。

○共に伊部に於て作らるゝものも、これを伊部、磨手及び火棒の三種に分てり、日本の玩賞家はよくこれを分識すれども、歐洲人の眼には、單に其原土の密度と色及釉薬の色澤に於て輕微なる相異を見るのみにて、皆同一のものと思はる。

○最も普通なる釉色は褐色にして、伊部は少しくこれに黄色をはねかしたる如く、火棒は多くの氣孔を有し且つ繩を以て結びたるが如き痕跡あり、磨手は其形最も念入りにも良く、釉色も光澤を帯ぶ。

過煉瓦に似たる色より、土質の藍に變じ、又其赤色は種々に變化して遂に鶯色となれるものあり。斯くの如く其原始的形式より進化して、これ等の變化を生ずるに至りし徑路は、容易に之れを知るを得べし。古備前は凡そ六百年以上のものにして、粗鬆崎形釉の施し方、焼き方共不完全のものなりしが、轆轤と窯の進歩とに伴はれて漸次改善進化したるものなり。

伊部

伊部焼の名は其産地の名より起る。土は暗灰色にして、暗褐色に通常鹿色の斑点ある釉を施し稀には鹿色の釉のみを全體に施せり。時として暗褐色の釉は全然黒色に見ゆることあり。而して殆んど盡く或種の記號を刻まる、其記號は圓あり、角あり、菱形あり其内に一、二、三、十等の文字を有す。之れに依りて丸一、丸二、丸三、丸十等と呼ぶ。而して全然同一のものにても異なる記號を有すること往々あり。之れ共同の窯にて焼ける異工の作なることを示すものなり。蟻川氏は嘗て備前に遊びて一骨董商より此陶工の系統を示すべき記號表を得たり。然るに予亦同じく一表を得たるを以て之れを比較するに其姓名、年月に毫も一致せる所

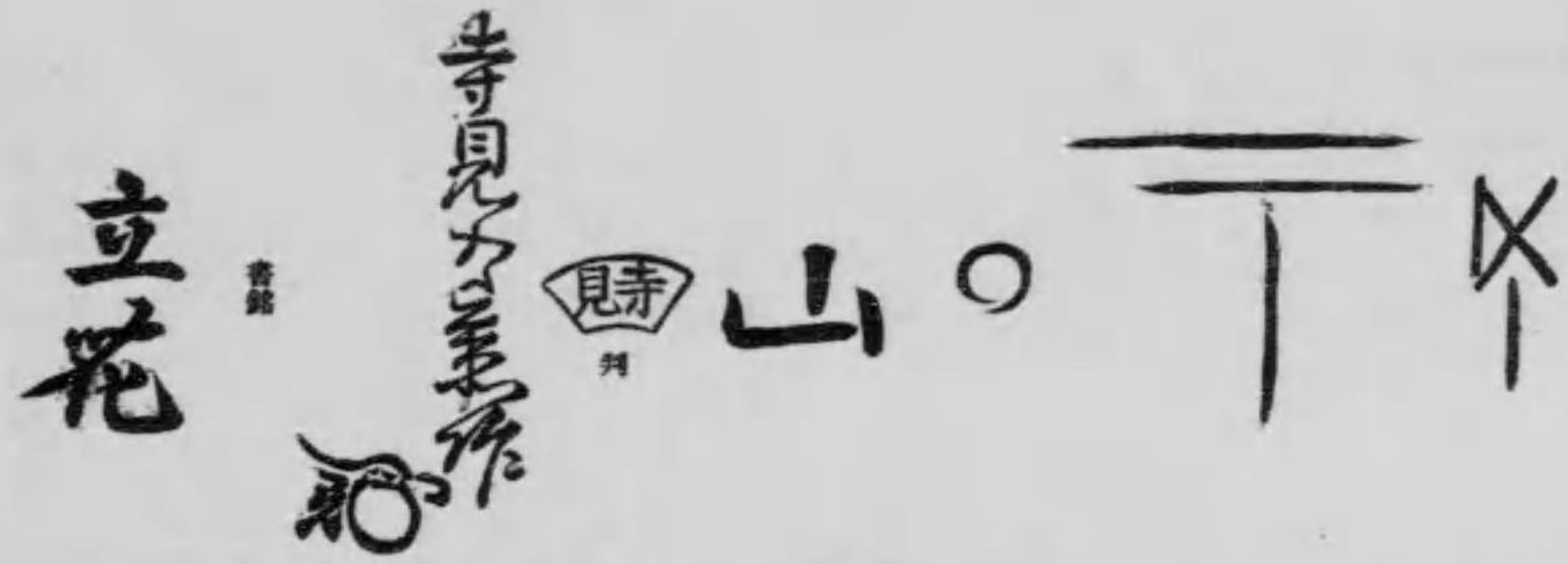
○繪備前は最も稀なるものにして褐色又は暗綠色を以て描かれ且つ所々に白釉の小點あり。



なかりしを以て共にこれを廢棄せり。最良の製品と稱すべきものに附せられたる記號は極めて少數なり。其初期の形体は粗野にして醜く其技術の頂點に達せしは十八世紀中のことあり。少くとも此時代の作と認めらるゝものは後世のものより遙かに優良なり。此黄金時代のものは磨きたる木材の如き表面に褐色或は鹿色の釉を施したるものなり。近來の輸出向作品は通常神話的動物又は神像の形態をなし其作法に多少の技巧を示せり。雖もこれを同種のものゝ往時の形式に比す

伊部茶入銘





れば宵壞の差あり。通常花を浮彫にせる淺き薄手の鉢は三十年以前の産出に係る。一八六四年(元久元年)より翌年に亘り此種類の鉢に赤及び青の釉を薄く施すの法企てられしが此方式のものは極めて稀なるを其見掛けの醜なるを以て有名なり。前に擧げたる各種の記號の外に陶工の名を現はせる多數の記號あり。之等の陶器が別々の窯にて焼かれしか共通の窯にて焼かれしかは明らかならず。

寺見の記號ある伊部色釉を施せる伊部磨手

此種のもものは土は精節せられ、色は鋼灰色にして、光澤あるものごあらざるものごあり。



青

此種のもものは其色沈みて石盤の如き藍色をなせり。

火禱

恰も縛りたるが如き赤線の班痕ある粗鬆にして釉なきものなり。之れ



濕りたる繩を巻きて火に入るより起れるものなりといへり。通圓の記號ある京都焼は此式に似たる所あり。一七〇〇年(元祿十三年)頃或る日本の専門家は、古備前の最良にして且つ最も珍重せらるゝは火禱なりと云ひしが其簡素なる點を除けば毫も特長の認むべきものなし。

岡山 當世紀の初め岡山の刻印ある陶器同地に作られたり、其今日に存するもの極めて稀なり。一八七八年(明治十一年)頃岡山に同種の稱號のものあり、眞に岡山にて造られしか或は薩摩より取寄せしかは明らかならず。されども、白土を用ゐ、無飾の薩摩焼に模したるものなり。何れも小形のものゝみにして概ね茶器の類に限れり。而して東京に販賣店を設けたりと聞きしが失敗に終りしなるべし。

虫明

一八三〇年(天保元年)伊木三遠齋虫明村に築齋し、京都より眞葛香山を





招きて焼かしむ。作る所多く茶器の類なり。いづれも虫明刻の印及び時に眞葛の印をも添加せり。

### 對馬

對馬は朝鮮の南端と日本との間に介在し數百年の久しきに亘りて朝鮮を模倣せる、陶工の故郷なりき。其初期の陶工及窯の所在地等は明らかならず。小堀遠州の時代に著名なる陶工中、對馬の七工と稱すべきは注目に値するものなり。其模範的陶器は殊に特色有りて誤認せらるゝ事なし。土は軟質にして鹿色に、時に淡紅色の斑點あり、征々白色の三島模様あり。稀には黒色のものありて、釉は光澤を缺けり。土佐と見誤らるゝこと往々あり、之れ此等の諸窯は共に一脈の朝鮮式に屬するを以てなり。

#### 志賀

此種のもものは其質殊に異色ありて、釉は淡紅色及び斑點あり。此村に於ける初期の陶工に關しては今何等知る所なし。  
一八〇四年(文化元年)吉田又市と云ふもの志賀に窯を開き朝鮮式の陶器を製す。欸あるもの稀なり。又市は尙磁器を作り、志賀の二字を記す。  
彌平太

○志賀村に一窯あり、朝鮮風の磁器及び藍繪の陶器を作る。



對馬の初期の陶工中に彌平太といふものあり、全然朝鮮式に則り茶碗を作れり。

#### 專作

專作の印ある淺き鉢あり、對馬焼と認めらる。

### 土佐

此國の陶器は其形式單調且概ね無銘なり。普通の形式は竹、梅、松を薄藍色に描き之れに黄味がよりし白、或は黄がよりし白の釉を施せる茶碗なりとす。

#### 正伯

尾戸焼に關して記録の示す所一ならず。蟻川氏は一書に於て、一五九八年(慶長三年)朝鮮より伴ひ來りし陶工中正伯と云ふものあり。尾戸村に居を定めて朝鮮風の陶器を作り、後其附近に良土を發見して色釉を施せる茶碗の製作を始めたといひ、又其朝鮮人は佛阿彌といひ、其後を繼きたる正伯技を其朝鮮人に學び、後仁清に學べり。云へり。然るに専門家たる谷村氏の説によれば、尾戸初代の陶工は正伯にして、三郎兵衛其後を受け、爾來歴代三郎兵衛と稱すと云ひ、更に又陶器證誌の著者は



尾戸焼は一六五三年(承應二年)仁清の弟子久野正伯の創製なりと斷言し、程なく正伯は大阪に歸りしが、一六七三年(延寶元年)森田光久といふもの、土佐藩主の命を受け大阪に到りて正伯に學び、又各地の陶場を歴観して尾戸に歸り、茶器雜器を製す。後一八〇四年(文化元年)窯を能茶山に移し世に能茶山焼と云ふ。

尾戸

宗閑

信憑すべき記録によるに、正伯の直繼者は樂焼を作れる陶工にして、宗閑の刻印を用ひたり。其作は頗る稀有なり。又一説には五十年前に東京に宗閑といふもの、在住せり、茶道の宗匠にして、其庭園内に窯を築き樂焼を作れりといふ。

高知

其産地の名に従つて名く。此窯に關しては何等記すべきなし。

高平

高平に關しても何等の記録を有せず。思ふに尾戸村の素人陶師なるべし。

屋山

屋山の刻印ある陶器は格別賞讃に値せず、近年のものと思はる。

朝

尾戸

宗閑

曾合録年代古し、土佐宗閑と思はる

高平



攝津

陶器に就ては攝津國は餘り有名ならず。往時は浪華窯の優雅美妙なる手法あり尙以前にありては高原焼の朝鮮寫し行はれ近年に至りては三田焼の青磁有名なりし以外、他の諸窯は僅かに一地方に行はれしに過ぎず。然もこれ皆京都陶工の努力に依つて其名を博せるに至りしなり。

高原

一六五〇年(慶安三年)高原と云へる陶工大阪に窯を開き暫らく朝鮮式の茶碗其他の器具を製作せり。記録の示す所に依れば前世紀の初め高原或は其子孫江戸に來りて同種の陶器を製せりといふ。

浪華

大阪の古名浪華の銘ある陶器は一六八〇年(延寶八年)大阪にて造られたり。浪華の梅を模様とせる猪口は其初期の製と稱さる。東京帝室博物館に五ツ組の猪口ありポストーン美術館亦同様の猪口を有す。極めて珍稀なるものなり。

古曾部

古曾部焼は前世紀の後半期四郎兵衛信平の創製に係ると云ふ。京都風を加味せるものかり。二世新造信平は丹波及び唐津に似たる釉を用ひ又朝鮮式を倣へり。三世新五郎信平は京都の六兵衛を模し。四世與惣次



吉部 初代

吉部 二代

吉部 三代

吉部 四代

吉部 五代

吉部 六代

吉部 七代

吉部 八代

十三

郎は一八七八年(明治十一年)なほ生存せり。其大なる盃及び茶碗の繪には大阪の畫家小松屋多助泰年と號すの筆になるものあり。

吉向及び十三軒の記號を使用せる陶工の一系は、日本の専門家をして大に迷はしめし所にして之れ恐らく鑑賞家及び茶道の好事家が此陶器に就いて何等の特長を認めざりしによるべく、而も此見解は正當なり。然るに拘はず予は各種の資料により此家系に就いて多數の材料を發見することを得しが、其記述は決して同一ならず。今其一例を擧げんに蜷川氏の論文中此家系に關する記述三篇を發見せしが、一は三代繼續せしものとし、他の一は六代とし、尙他の一は十三代とせるが如し。綿密なる研究の結果吉向が嘗て伊豫に於て製陶に従ひしことを證せんとして失敗せしが、記録には一時此處に窯を有せしことを示せり。又吉向が嘗て周防に在りし事は何の記す所なけれども、其作は最も雄健巧妙なるものかり此矛盾せる資料に就いて考ふるに同世紀の初め伊豫の産なる戸田治平と呼ぶ陶工大阪の十三に窯を起せりと推定し得べし。十三にて一八一九年(文政二年)始めて吉向の印章を用ゐたるものにして、其大阪にありし期間は明らかならず。一八三一年より一八三四年(自天保二年至同五年)に至る間周防の岩國に窯を有し内模様ある硬質の黄色南京焼を作り又樂焼をも製したり。此時の刻印は吉向及十三

經手

吉向

吉向

吉向

吉向

吉向

吉向

軒なり。周防國の章參照一八三五年(天保六年)技術修業の爲め信濃國須阪に赴き、信濃國參照其後東京に出で向島にて陶器を作りしが終に一八六一年(文久元年)客死せり。此吉向が一八一九年(文政二年)大阪にて陶器を作れる吉向と同一人なりや、或は二代又は三代の裔なるか、未だ明らかならず。今日吉向と云ふ圓形の印ある白釉を施せる樂焼東京にて作らるれども、之れ亦此系統のものか、支流のものか、手にあるか詳ならず。

櫻井

櫻井村の窯は前世紀の末葉樂一派のものゝ起せる所に係る。其陶器は簡素にして高取焼に似て光澤強き釉を施せるものと、白色又は暗黒色の釉を厚く施せるものとあり。松樹の下楠公父子訣別の境を繪く。蓋し此松樹は近年迄殘存せしものと云ふ。此陶工の現代は三代目にして清水太十郎といひ、櫻井里の印を用ふ。

蜷川氏の説に依れば、此窯は久太といふ工人の開く所にして後木米周平等の助力により大いに進歩せるなりと。

集山

素人の陶を作れるものにて前世紀末年頃の人と思はる。

高津

高津は大阪郊外にあり、二百年以前より窯業を繼續せり。近年の作に漆



黒にして光澤強き釉を施せる茶碗あり。銘なし。

久山

一八七〇年(明治四年)柴田久山大阪附近に窯を起し京都より陶工を招きて茶器を作らしむ。

松齋

一八六〇年(萬延元年)大阪の茶家風呂師松齋といふもの吉向の古窯にて赤樂の器を作る。白釉にて模様を描く。

米山

詩人また畫家として著名なる人なり。一八三〇年(天保元年)大阪にて陶を造る小形なる形像の類なり。米山及宇治の銘あり。

三田

蟻川氏の説によれば當世紀の初め有馬焼と稱して京都の陶工頼川の門弟周平、龜助及び龜吉の三人支那青磁を此所に摸作せりと海の如き藍色の美しくしき青磁は押型にて造られ、産額頗る多し、其手法丹波に似たりと稱せらる。



分館  
茶

○一六九〇年(元祿三年)九鬼侯は三田に一窯を創め支那青磁の模作を試ましむ。土は淡褐色にして堅く、仕上り甚だ美しく。薄肉の浮彫あり青磁釉を以て被はる。初期のものは製作釉色共に甚佳なれども近世のものは非難頗る多し。  
○元祿年間九鬼侯の有田に開窯する所なり、支那青磁の模作を目的とす、眼識ある人も能く支那青磁と比して真偽を極め難きまで精巧なるものを製するを得たり。

○舊記に基督紀元の始め、新羅の人、近江に來りて陶業に従ふと、然れども一三〇〇年(正安二年)當國長野村に信樂窯の開かれて種盛の如き粗陶を焼成したる外、記すべきなし。

○十六世紀の始め、茶道の隆盛に伴ひて茶人の此窯を愛玩するもの多く、從て各種の名稱起るに至れり、武野紹鷗の賞玩せしを紹鷗信樂と云ひ、利休の好愛せしを利休信樂と稱せしが如く、宗旦、遠州等の名あり。此地の坏土は、仁清、空中等京都陶工の用ふる所となり、各其名を冠して仁清信樂等の稱あり。

○紹鷗信樂は石焼に屬し、甚だ硬く且つ重し、黄味が、りし赤色の釉を掛け、其上に緑青色の釉にして時には透明なるを流しかけたり。茶人は此器の趣味多き外觀を喜べり。朝鮮、安南及東印度諸嶋に於ける陶器と相似たり。

○信樂の一種に薄く且つ輕きものあり、甚だ稀なり。  
○宗旦信樂と稱するは一六一〇年より一六五〇年頃迄(慶長十五年より慶安三年迄)製されたり、白土にして美しき上釉を掛けたり。  
○下駄齒と稱するものあり、其底に日本の下駄の如き痕あり。一八二八年(文化十一年)徳川將軍慶白

### 近江

近江陶器の稱すべき點は、他の諸國に於けると同じく、其藝術的因襲に忠實なるにあり。信樂の大茶壺は五百年間不變に此陶器の最も有力なる形式たり。光澤釉の茶壺及び其他に用ひられし鮮美なる釉色は何れも佳良なり。京都陶工の別府及彦根移住從つて京都式の輸入せられしに拘らず近江の陶工は外國人の格外なる趣味に迎合せんとして其技を墮落せしむることなし。其摸範的にして上代の陶器を除けば此國最古のものたる信樂焼は約一千年の昔に生まれり。其形式に輕微なる差異あると、時代の影響とを除けば今日の製も概觀に於て殆んど何等の相異なる點を見ず。

信樂

信樂村に日本最古の窯の遺跡あり。信樂の茶壺は同種の陶器中最も茶の保管に適すと稱せられ、十六世紀の後半には大に流行したり。摸範的信樂は一見して其信樂なることを知るべく、坏土は質粗にして些か赤味を帯び、珪酸の砂を混じ、而かも近年の作は透明なる釉を薄く施し、間其上に濃き釉を斑に施せるなど全く他に見ざる所なりとす。信樂にも數種あり。其中坏土を充分に節ひ、綠、鳶色、或は黒色の釉を掛けたるものあり、稀に裝飾を加へたるものあり。

梅山



耳附と稱する茶入を作らしむ、爾來此窯は茶入の製作に名あり、又茶の香味を保つの特色ありと稱せらる。

○十七世紀の前半、膳所の人名川忠房窯を起し小堀遠州の意匠に従つて焼成す、褐色の茶入を主とす、これ日本人の間には甚だ賞玩されるれども歐洲人の眼には、他窯のものに比して何等特異の点を見ず。

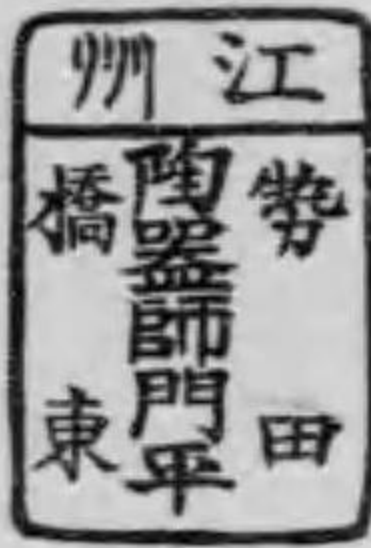
大江 大江陶器の起原は明らかならず、鳶色の釉を用ひ指もて大江と記せる古代の作物現存せり。後代の茶壺は容易に識別し得れども、極めて稀なり。

膳所 膳所の名は近江の地方的古物と共に其釉及陶工の廣汎なる範圍を包容す。然れども此處に云ふ膳所は茶壺及び其他高取焼に似て而かも其性質を異にせるもののみなり。

瀬田 此陶器は三百年以前より瀬田村にて作らるる云ふ。一六三〇年(寛永七年)製の水瓮及茶壺あり。

門平 池田門平は素人なり、瀬田村にて樂焼を製せしが、二代目門平京都より陶工を招きて製陶の術を學ぶ。其初期のものは有趣のもの多し、印は押印及書印あり。

大津 梅林 當世紀の初め膳所の南方別府村に窯を起こし京都より陶工を招き京都式なれども意匠と手法に新機軸を出せり。通常緑と黄、緑と紫、葡萄色



萬字

字



梅林



湖東



湖東

湖東製



比良

と黄の如く二色を以て釉とし梅林の印を用ふ。又鶯溪の印あり。

湖東 湖東焼は彦根侯の命により彦根城の東方佐和山にて製出さる。窯の創設は一八一八年(文政元年)にして、京都より陶工を招きて焼かしむ。近年京都及び瀬戸より多數の陶工同地へ入れる以前のものは何等の特長なかりしが、其より一新紀元を劃し、瀬戸及び京都式に九谷風を加味したるものごなれり。然れども水戸浪人の彦根侯暗殺と共に廢窯に歸せり。

姥餅 姥餅の銘ある陶器は草津の産なりといふ。其作品は古風の雄健なる陶工の手腕を現はし信樂に酷似せり。

龜山 龜山の巧妙なる茶碗、此世紀の初め信樂にて作られたり。

比良 比良の銘ある陶器は琵琶湖の東岸に在る同名の村にて作らる。作品は形小にして其作巧妙、些少の裝飾を施せり。坏土は黄或は赤味がかり、釉は薄くして暗色なり。裝飾あるものは鉄錆色を以てす。仁清の門弟某の始むる所なりといふ。

長良山



赤土

焼虎

焼

友吉

友吉

いせ

堂

此窯は一八五〇年(嘉永三年)三井寺山に起り少時にして絶ゆ。在銘のもの稀かり。

虎吉

蜷川氏の説に虎吉と云ふ陶工京都より來りて膳所に住し、其作は膳所虎として知られたり。焼虎の印は虎即ち恐らく虎吉の作なるべし。

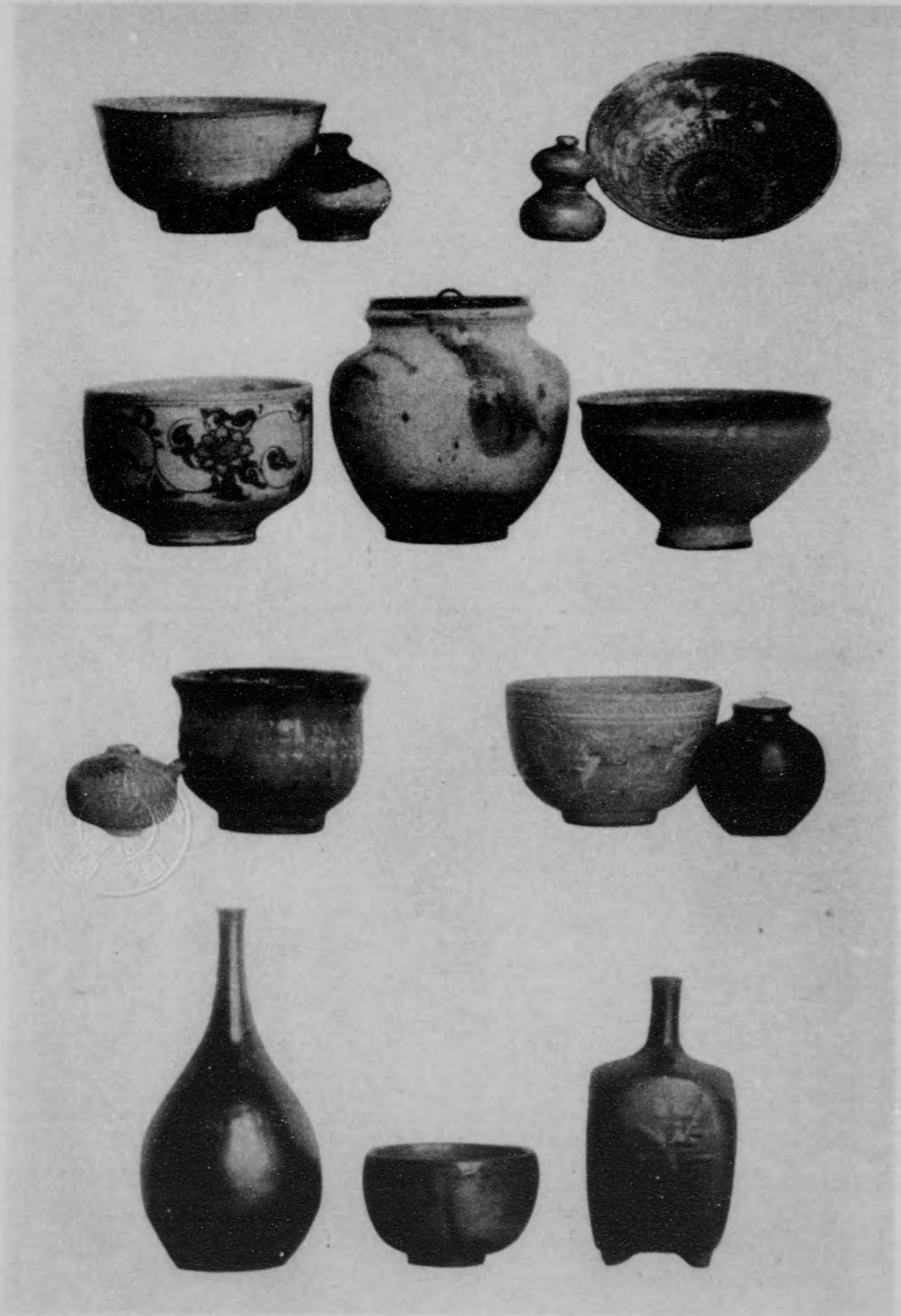
友吉

友吉の印ある黒樂焼の茶碗は信樂と認定せらる。一説に陶器考の著者が焼成するところと云ふ。

芭蕉堂

釉を施さざる小急須、芭蕉堂と書きたるもの同名の一小村の産なり、常に似たれども何等の特長なし。





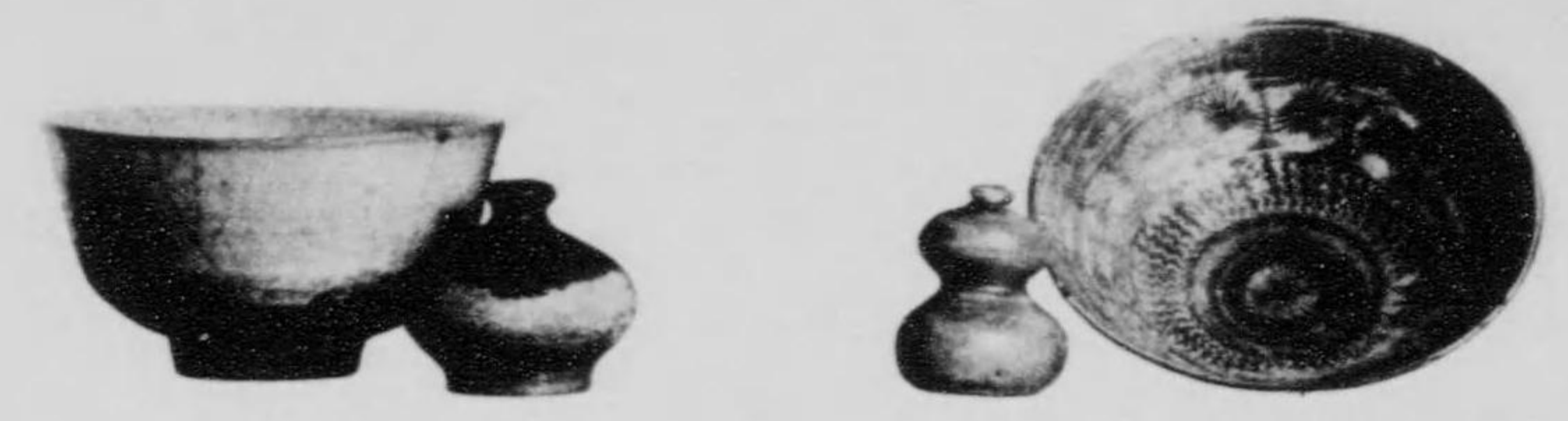
全全全  
津

五全店  
七 津

網松製  
田風田長

全全伊  
部





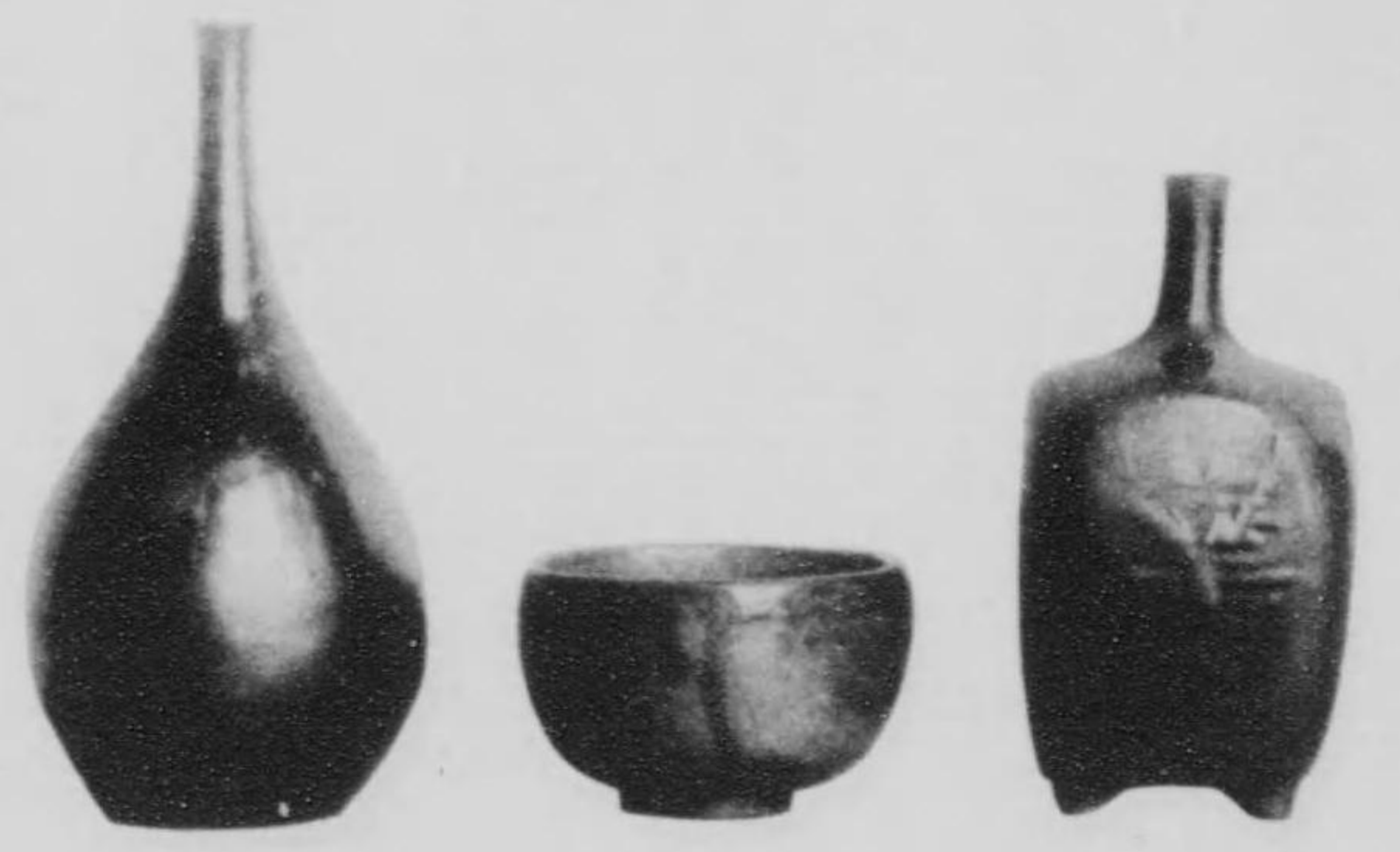
五全平



五全平  
即  
七



五全平  
即  
七



五全平



尾  
戸



尾  
正  
戸  
伯

志  
賀



深  
雪  
川  
山



志  
賀  
櫻  
井  
里

信  
濃



信  
濃  
平  
太  
所

比  
呂  
波  
部



比  
呂  
波  
部  
古  
曾  
部



418  
25

日本陶磁器全書第六卷

大正七年六月二日印刷  
大正七年六月六日發行

【會員以外非賣】

發行兼編者 東京市芝區芝公園十一號地  
日本陶磁器協會

印刷者 川上邦基  
東京市麹町區平町七番地

印刷所 岸山芳太郎

印刷所 光琳社印刷部

寫真攝影 大塚  
寫真製版印刷 武田勝之助  
木版製版印刷 漆原三太郎  
製本 神戶義一郎



終

